様式２

令和7年度　調布市立緑ヶ丘小学校　学校評価報告書（学校長　大原　年博）

学校の教育目標
○正しくきまりを守る子　◎よく考え進んでやりぬく子　○明るい心とじょうぶな体の子　（◎＝今年度の重点）
目指す学校像(ビジョン）例）学校像，教員像，児童・生徒像
「愉しく力のつく学校」○児童一人一人が生き生きと活動する学校　○安全･安心な学校　○地域や保護者に信頼される学校

調布市立学校における共通した領域　＜短期的な経営目標＞

	1　豊かな心(徳)	評価	2　確かな学力(知)	評価	3　健やかな体(体)	評価
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
	①あいさつ、言葉遣い等に関する指導を徹底するとともに、具体的なやさしい言葉かけ等を示し、相手を思いやる心を育てるようにした。４月に構成的エンカウンターを実施、５年生対象にSC 全員面談の実施、１２月にいのちの授業を実施。	B	①ユニバーサルデザインの考え方を教員に身に付けさせ、基礎・基本を大切にしながら、すべての児童にとってわかりやすい授業づくりを目指す。	A	①運動に親しむことを目的とした「ちょこプラ１」を推進するとともに、運動量を確保した体育授業を工夫する。	B
	②毎週の校長講話でいじめや人権にかかる話題を多く取り上げるとともに、給食がカレーの日を「人権の日」と位置づけ学級で話し合うなどの日常化を図り、いじめ等の未然防止・早期発見・早期対応に努める。	B	②問題や課題を児童が自ら見いだし協働的に解決していく「探究的な学び」への取り組みに向け、社会科を通した校内研究に取り組み、年７回の授業研究等を通して、従前の教師による教え込み教育からの脱却を図る。	A	②中休み等を活用した日常的な運動の取組の充実を図る取組「うごきタイム」の実施。縄跳び、大縄跳び、投力向上に向けた取り組みの実施。	B
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①保護者アンケート「学校は児童の望ましい関係づくりのための指導や取り組みをしている」肯定的回答９０％を目指し、結果は９２％であった。	B	①保護者アンケート「学校は、基礎・基本の定着等、児童にわかりやすい指導をしている」肯定的回答９０％を目指し、結果は９４％であった。	A	①「チョコプラ１」の取組は市教育委員会からの取組期間と取組カードの配布もあり、学校全体で取り組むことができた。	B
	②保護者アンケート「児童は学校で楽しく学校生活を過ごしている」肯定的回答１００％を目指し、結果は９６％であった。	B	②北俊夫先生・神永典郎先生を講師として招聘し年間を通して研究を深めた。保護者アンケート「学校は児童に自分の考えをもたせたり、表現させたりする指導をしている」肯定的回答９０％であった。	A	②「運動に親しんでいる」という回答が９０％以上。→保護者アンケートは９２％。「うごきタイム」では運動能力低下にかかる課題を教職員が共有し、工夫して実施できた。	A
学校運営協議会評価	・朝の登校時に、見守りをする健全育成委員や保護者の方に積極的にあいさつをする児童が多く見られ、爽やかな学校生活の始まりとなっている様子が見られる。挨拶の大切さについて日頃から子どもたちに伝えている成果が表れていると評価できる。 ・いじめ防止についても人権カレーの日を設定する等、意識して継続的に取り組んでいることは、よい取組なので、今後も継続していってほしい。 ・目標値が 100％であるためＢ評価となっているが、「児童は学校で楽しく学校生活を過ごしている」の肯定回答が 96％と高くとても素晴らしく、保護者の学校に対する信頼や安心感に繋がっていることに感謝したい。さらに肯定的回答が 100％に近付くよう、継続して取り組んでいってほしい。		・基礎・基本を分かりやすく身に付けるための指導や、社会科・生活科の授業研究を通して、自分の考えを表現できる児童の育成に取り組まれている先生方に感謝したい。 ・これまでの指導方法を改善していくことは容易なことではないが、年間を通した授業研究は大切なことであり、今後も継続して取り組んでいってほしい。 ・授業において、地域連携を図った外部人材を活用した授業や、実感納得を伴った体験的な学びを実施したり、授業を理解できていない児童が少なくなるよう、「わからない」を「わかった」にする努力をしたりしていってほしい。また、支援員の活用等必要な人材の確保にも努めていってほしい。		・気候変動の影響やゲーム等で室内で過ごす時間が増える中、学校全体で「ちょこプラ1」「うごきタイム」等、児童の運動能力低下にかかる課題を教職員で共有し、体力向上の取組がなされていることに感謝したい。 ・体力向上への取組が学校だけでなく、家庭でも体力作りや規則正しい生活を意識して行うことができるように、保護者にも周知して広げていってほしい。	

学校の特色を生かした領域　＜短期的な経営目標＞

	4　地域との連携	評価	5　特別支援教育の充実	評価	6　端末を活用した教育活動の充実	評価
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
	①地域と連携した取り組み「こいのぼり流し」「チューリップ植え」等 第八中学校との交流「学校訪問」「おすすめ本の紹介」の実施 地域の講師を招き課外活動「調布市タグラグビー大会」に参加	B	①校内研究に通級指導チームが参加する形で講師を招聘し授業研究を全校で行う。	B	①ICT 推進委員会でタブレット使用にかかるリテラシー計画を策定するとともに、各学級で実践していく。	B
	②白百合女子大学との連携の充実 白百合女子大学からの学生の受け入れ、第１学年生活科「秋探し」を大学構内で第２学年「わたしたちの町たんけん」を大学構内で実施。	B	②２週に一度程度担任の授業を通級担当者が参観し、情報を交換することで指導方針や指導観を共有し指導に役立てる。	B	②日々の学習指導を踏まえた自己評価や家庭学習への活用等一人 １ 台タブレットの有意な活用法について研究・実践する。	B

	⑵　成果（数値目標に対して）	評価	⑵　成果（数値目標に対して）	評価	⑵　成果（数値目標に対して）	評価
	①「こいのぼり流し」は教育活動に組み込み、全児童が参加した。「チューリップ球根植え」への声掛け等を工夫して取り組んだ。	B	①校内研究にはすべて通級担当も加わり活性化できた。学級担任や専科教員も、通級教室ではどのように授業を行っているかの共通理解を図ることができた。	B	①学期に１回程度、学年学級等の実践を発表する場を設けた。各学年の工夫の度合いには濃淡があるが、教職員が自分なりに活用の手ごたえを感じている。「個別最適な学び」に向けた実践が課題。	B
	②保護者アンケート「児童は地域の環境、文化、自然、外部の人材を生かした指導をしている」肯定的回答９０％を目指し、結果は８５％であった。「よくわからない」が８％ほどだったので、今後は取組を学校だよりやホームページでお知らせしていく。	C	②２週に１度の参観は実施できた。保護者の困り感を担任と共有し、組織的に解決に向けて動き出すケースが増加した。	B	②「普段からタブレットに親しんでいる」と回答する児童の割合が８０％以上を目指し、結果は９０％であった。	A
学校運営協議会評価	・緑ヶ丘小は、地域の方が児童を温かく包んでくれ、成長を見守ってくれている地域であり、これからも「地域とともに」を大切にして交流する機会を持ち続けていってほしい。 ・こいのぼり流しやチューリップ球根植えは、目に見える活動で分かり易いが、児童が「地域との交流」を大切にしたいという意識を高めるための方法については、工夫しながら継続して取り組んでいってほしい。 ・八中との小中連携は、小学生見学会や合唱発表会、緑ヶ丘小出身生徒による本の読み聞かせなど、体験を通した学び場として大切にして、継続させていってほしい。		・通級教室の授業（支援）がどのように行われているか、授業研究に組み込み、学級担任や専科教員も参観して全校で共通理解し、連携を図っている取組はとても大切なことである。今後も、そのような取組体制を継続していってほしい。 ・一人ひとりの児童の成長に視点を置き、小学校で育ちをつないでいく中学校との連携も大切にして、進めて行ってほしい。		・先生方が情報端末を活用した実践について互いに発表し、より良い活用法について学ぶ場を設けて取り組まれていることに感謝したい。 ・特に低学年においては、諸感覚を働かせた直接体験から学ぶことも大切な時期なので、どのような場面や活動で活用すると楽しく効果的な学習ができるか、また、教員によって活用状況に差が生まれないよう、継続して研修に取り組んでいっていただきたい。	

人材育成・組織運営	
自己評価	①　学校運営において、各職層の資質や能力を高めるために、校務分掌が有効に機能した。業務の進行に合わせて、上位職層が状況を随時確認し、必要に応じて業務の調整や指導・助言等を行う場面が見られるようになった。 →主任教諭を中心に企画・立案した実施案等が、主幹教諭との共有を経ることで、課題が整理され、管理職が相談の場で的確に対応する流れが定着し、これまで不安定だった部分が解消された。その結果、主幹教諭の学校経営への参画意識が大きく高まった。また、主任教諭においても、学校経営への参画意識に加え、課題を見出す力や改善に向けた意識が向上してきている。 ②週に１回ほどの経営会議を実施し、主幹教諭･主任教諭を通して学校の課題を発見・共有するとともに、校務分掌等の進捗状況の確認及び指導・助言を行ってきた。→若手育成についても、全教職員で支え、指導に当たる体制が整いつつある。また、生活指導における組織的な取組が可能となった。今後は、より良い人材育成と組織運営の在り方について、さらに検討していく必要がある。 ③主任教諭の学校経営参画意識を高めることを目的に、OJT 研修の充実を図った。研究主任を中心に計画的に OJT を実施することができ、若手教員育成における主任教諭としての職責に対する自覚も高まってきている。また、各教員がそれぞれの得意分野を生かして指導に当たることで、学校全体の指導力向上につながった。
学校運営協議会評価	・初任者や若手教員の育成について、全教職員で支え合って指導する体制が取られていること、生徒指導における組織的な取り組み体制が取られていることに感謝したい。学校体制として、教員同士がお互いに情報共有し合ったり補い合ったりして支え合っていけること、よりよい学校づくりに向けて同僚として率直に互いの意見を出し合える場が維持されていること等、このような学校体制や職場環境を引き続き維持して取り組んでいってほしい。 ・学校における働き方改革の取組が、どのようにされてるかを見える化していくことや、学校の組織としての教員のサポート体制がどのように確立されているかが大切になってくると考える。学校として、管理職だけでなく主幹教諭と主任教諭も加わり学校経営への参画意識を高めて、それぞれの立場や職責に応じて力を発揮するとともに、管理職が相談の立場で支える大変よい組織体制による学校運営ができているので、それらを引き続き維持し、さらなる学校経営の質の向上を図っていくことを期待しています。

中期的な経営目標の達成状況

1　【最大の教育環境は教師】

＊偏見や差別を許さない人権感覚の醸成　＊児童相互の良好な人間関係の形成と自他を尊重する態度の育成

→互いを認め合う温かい校内環境はさらに整ってきている。また、給食献立（カレーライス）と連動させて、月に１度「人権の日」の設定した取組は、人権意識の日常化につながっており、教職員一同、その手応えを感じている。

2　【授業改善を通した学力向上】

＊新学習指導要領の全面実施を踏まえた授業改善　＊主体的な学習態度の育成

→探究活動において、児童が主役となる問題解決学習を目指した校内研究を、北俊夫先生や神永典郎先生を講師として招聘して実施することができた。研究で得た学びを他教科の授業に生かすなど、教員の指導技術は着実に向上してきている。また、授業改善の必要性に対する意識が多くの教職員に芽生え、実践的な取組が見られるようになってきた。

3　【家庭と連携した生活・運動習慣の確立】

＊生活習慣の確立　＊体育授業の改善と運動の日常化による体力向上

→屋外で体を動かす場面を多く設定し、児童の体力の維持・向上やけがの防止・生活リズムの安定に努めた。また、「チョコプラ１」「うごきタイム」などの取組を通して、運動量や活動時間を確保し、児童の運動能力の向上を図ることができた。

→保護者の悩みに素早く対応することを心がけた。不登校対応、いじめ案件、特質のある児童への配慮について等丁寧な対応を心掛け、関りを継続している。

4 【特色ある教育活動】

＊地域の福祉施設、保育園等との交流活動の推進　＊「ふれあい交流」事業　＊第八中学校・白百合女子大学との連携強化を図る。

→挨拶運動やこいのぼり流し、チューリップ球根植え、スポーツチャンバラ大会など、地域や保護者の方々による多様な工夫と協力を得ながら取組を進めるとともに、白百合女子大学や第八中学校との連携も強化した。その結果、学校内外のつながりを生かした教育活動が広がり、一定の成果を上げることができた。

5 【特別支援教育の充実】

＊通級拠点校のメリットを生かし、通常学級との連携で相乗効果を促す。

→特別支援教育の充実に向けて、通級指導教室の拠点校としてのメリットを生かし、通常学級との連携を図ることで相乗効果を生み出してきた。連携型個別指導計画を作成し、保護者との面談を通して、児童一人一人の実態に応じた支援体制を整えることができた。また、デイジー教科書の使用を認めるなど、合理的配慮にも継続して取り組んできた。

6 【ICT を活用した教育活動の充実】

＊一人１台端末のメリットを生かし、効果的活用を推進する。

→ICT を活用した教育活動の充実を図り、一人１台端末の利点を生かして計画的に授業に取り入れた。ICT 担当が中心となり講師の活用も行うことで、個別最適な学びや協働的な学習による理解が深まり、授業に効果的に ICT を取り入れている教職員の姿が多くみられた。

次年度の重点課題

- 魅力ある学校づくり（探究的な学びを中核にした授業力の向上、確かな学力の定着、行くのが楽しみな学校づくり）
- 子供たちが自分たちで学校生活をより良いものにしていこうとする意識の醸成。
- コミュニティスクールの取組の充実、地域と連携した学校づくり（まちづくり協議会等地域の諸組織との連携、近隣中学校、大学等との連携の強化）